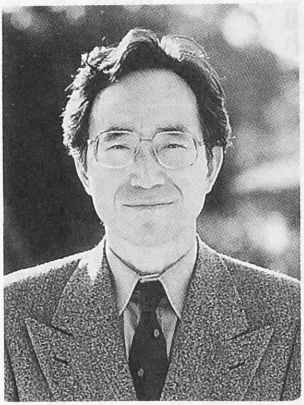
跡見と歩いたスペイン美術の道一九年

大高保二郎

跡見に奉職して一九年（非常勤職の一年を含めれば二〇年）になる。赤ん坊がほぼ成人する歳月である。着任間もない当時（昭和五三年）の本学園はのどかで、鷹揚で、どこか貴族的な気風もただよっていた。美術史の先生方も、『校刊美術史料』の藤田経世先生が非常勤ながら平塚から老軀をおして通われ、日本近代美術の久富貢先生も御健在だった。何か揉め事があった時は三山進先生が見事な裁きをされて結着、その二次会はどういう訳か、志木の寿司屋の二階でよくやったことを覚えている。

私の方は三年間の留学から戻って一年半、福部先生のお誘いで教壇に立ってはみたものの、若い女子学生たちに何を、どう教えたらよいのやら、赤面しつつ汗をかき、いつも途方に暮れていたように思う。特にスペイン美術という、強烈な個性と野性味の、悪く言えば野暮で泥くさい民族の視覚的結晶が若い女性たちの感性に訴えるものがあったのだろうか。例えば、印象派とか象徴派のような絵画を中心に講じれば、もっと心地よく受け容れられるのではなかったか……そう迷いつつ、しかしひたすら、毎回の講義を興味あるもの、少しは充実したものとすることを目標に掲げて続けるしかなかった。今思えば、スペインとは激しい生と死への情熱ではなかったか。スペイン美術を教えることに自負と信念を抱けるようになったのはようやく、ここ五年ぐらいのことではなかろうか。エル・グレコやベラスケスに心が開いたというか、心を通わすことがいくらかは出来るようになったのである。

跡見にきて間もなく、バロック時代の巨匠の一人、ベラスケスに関する留学時代の研究成果を「ラス・メニーナス」論



（『美術史』一一〇号）にまとめ上げた。またその頃、何冊もの画帖や素描、習作類を網羅したピエール・ガッシエ著の画期的な『ゴヤ全素描』二巻（岩波書店）の翻訳に携わることができ、大きく飛躍できたように思う。翻訳術を、恩師で共訳者の故神吉敬三上智大学教授に教わる一方、ゴヤという巨大な画家の創造の根源に触れえたからである。同書に近年発見された「イタリア画帖」（図版1）も加えれば、ゴヤがピカソと同様、身辺の様々な事件や情景を、まずは日記のように描くことから始めていったことが明らかになるだろう。

他方、エル・グレコについてだが、ドメニコス・テオトコプーロスという本名をもつクレタ島生まれのギリシア人画家であることがいつも頭から離れなかったし、また東方キリスト教美術系の図像学や特異な色彩も、肖像画の正面観なども非スペイン的で、ずっと気がかりになっていた。ところがそうした疑問に答えるかのように、エル・グレコ自らの手で註釈や批判、解説が余白に書き込まれたヴァザーリの通称〝美

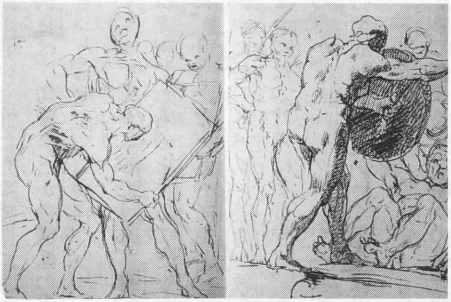


図1　ゴヤ　「裸で闘う男たち」
イタリア画貼　1771年頃

図2　イコン「聖母の死」　下にドメニコス・テオトコプーロスのサイン

図4　ストーンヘンジ、ソールズベリー近郊
イギリス

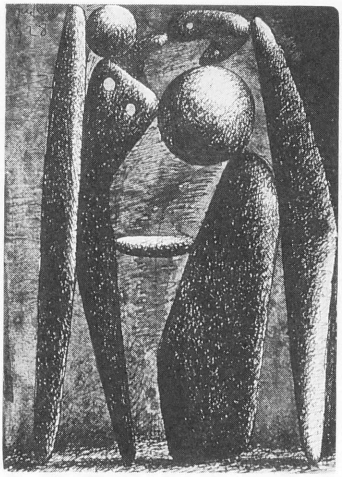


図3　ピカソ「水浴者たち」
1928年

術家列伝〟と、ウィトルウィウスの『建築十書』が奇蹟的にも発見され、彼がギリシア人で哲人的、人文主義的な教養人画家であることが実証された（オリベッティ社発行　SPAZIO　50号）。さらに相前後して、今度は〝ドメニコス・テオトコプーロス、余が描く〟ΔΟΜΗΝΙΚΟΣ ΘΕΟΤΟΚΟΠΟΥΛΟΣ Ο ΔΕΙΞΑΣと署名された板絵のイコン（図版2）が地中海のシロス島で発見され、それまでは記録でしか跡づけることができなかった〝イコン画家〟エル・グレコの姿がほのかながら蘇ったのである（『エル・グレコ』、アサヒグラフ別冊　西洋篇28）。作品という事実は何にも増して強い。

跡見時代を通してもっとも輝かしい、幸運な思い出は一九八三年の夏から一年間、本学の国外留学制度の援助を受け、スペインと中南米世界のバロック美術を研究する機会に恵まれたことである。特にメキシコ、エクアドル、ペルー、ブラジルなどへ、わずか三ヶ月の駆け足調査旅行は三十歳代でも最後のエネルギーを燃焼せずしては実現できなかったであろう（『世界美術大全集16　バロックI』　小学館　）。

スペイン美術全体への展望が開けたのはバルセロナ・オリンピックの一九九二年、全五巻のプラド美術館シリーズ（日本放送出版協会）の刊行によるところが大きい。

最後にピカソだが、私の絵画芸術論の構築においては、ピカソの作品やその思想から決定的な影響を受けている。「芸

術に進歩という言葉はない」、「一枚の絵は破壊の集積である」、「抽象絵画なんて存在しない」、「私は日記のように絵を描く」などかなり過激な警句とメタファーに満ちたメッセージはその折々の創作と絡ませて再考すれば、一層意味深長に響くはずである。

アルタミラの洞窟絵画やアフリカ、オセアニアの部族（黒人）彫刻、エジプト、キュクラデス諸島、またギリシアやポンペイ、イベリアなどの古代地中海世界の諸美術やカタルニア・ロマネスクといった、総じてプリミティヴ（原初的）な芸術を再評価し、堂々と自作品に活用しえたのは、ピカソが最初の美術家であった。その後プリミティヴィズムは二十世紀前衛芸術運動の最大の指標となるのである。一昨年の「ピカソ　愛と苦悩〝ゲルニカ〟への道」展は、『ゲルニカ』の誕生を闘牛、磔刑、ミノタウロスなどの三大テーマに探りながら検証する試みであったが、ここでもプリミティヴ芸術の影響はおそろしく大きなものがあった（例えば図3、4）。

こうして振り返ると、跡見での一九年間はスペイン美術に捧げられたと言えるだろう。学問はもとより、人間的に至らない私のような者がここまで無事にやって来られたのは美学美術史学科の諸先生方の寛大さがあってのことである。それと同時に、私のつたない論に耳を傾け、睡魔をこらえて講義を支えてくれた聴衆がいなければ、ここまで来られなかった。その意味でも、一九年間のしなやかだった学生諸君に心から感謝の言葉を贈りたい。

In the end, there is only love. However it may be. Picasso

（要するに愛だ。どのような形でも……。ピカソ）

略　歴

昭和二十年八月二十四日　香川県大川郡富田村　生
昭和三十九年三月　香川県立高松高等学校卒業
昭和四十三年三月　早稲田大学第一文学部美術史専修卒業
昭和四十六年三月　早稲田大学大学院文学研究科修士課程（芸術学・美術史専攻）修了
昭和四十六年四月　同大学大学院博士課程（芸術学・美術史専攻）入学
昭和四十八年十月　スペイン政府給費留学生として渡西、国立マドリード大学哲・文学部博士課程（美術史専攻）入学
昭和五十一年六月　同大学博士論文提出資格取得後、満期退学
同年九月　帰国
昭和五十二年三月　早稲田大学大学院文学研究科博士課程

（芸術学・美術史専攻）満期退学
昭和五十二年四月　跡見学園女子大学文学部非常勤講師
昭和五十三年四月　同大学専任講師
昭和五十六年四月　同大学助教授
昭和六十一年四月　同大学教授
昭和五十二年～平成八年の期間、以下の諸大学において非常勤講師
早稲田大学第一文学部、武蔵野美術大学、立教大学文学部、清泉女子大学、神奈川大学、早稲田大学文学部大学院、東京外国語大学外国語学部、東京大学文学部、成城大学文学部大学院、上智大学外国語学部

業　績

調査研究

昭和四十三年五月～九月　早稲田大学ソ連・東欧ビザンティン美術調査団（団長　高橋榮一助教授、当時）のメンバーとして旧ソヴィエト、東ヨーロッパからギリシアにかけてのキリスト教美術を踏査する。

昭和五十八年八月～五十九年九月　スペイン高等科学研究所附属ベラスケス研究所の客員研究員として、スペインおよび中南米のバロック美術を研究。その後、ブラジルを含むラテンアメリカ諸国の十六、十七、十八世紀の美術を調査旅行（跡見学園女子大学留学制度による。）

著書（共著）

『ベラスケス』（新潮美術文庫12）　新潮社　昭和四十九年八月

「ベラスケスの生涯と芸術」　世界美術全集11『ベラスケス』（安東次男氏と共著）　小学館　昭和五十三年十一月

「ベラスケスとフェリーペ四世――薄明の王国のアトリエで――」　世界の大画家15『ベラスケス』（吉田秀和氏と共著）　中央公論社　昭和五十八年五月

「ピカソ　死と愛のラベリント」　アートギャラリー現代世界の美術12『ピカソ』（神吉敬三氏と共著）　集英社　昭和六十年七月

「人間の根源をつかんだ巨人の野望」　アサヒグラフ別冊西洋編3『ゴヤ』（飯田善國、佐々木孝氏と共著）　朝日新聞社　昭和六十三年三月

『エル・グレコ　異邦人は光を見た』（ＮＨＫプラド美術館1　共著）　日本放送出版協会　平成四年三月

『ピカソ　戦争と平和』（ピカソ美術館4）　集英社　平成四年四月

『宮廷画家の夢』（ＮＨＫプラド美術館2　共著　二、三章執筆）　日本放送出版協会　平成四年五月

『スペイン黄金時代』（共著　「王家の芸術擁護」執筆）　日本放送出版協会　平成四年五月
『王室の大いなる遺産』（ＮＨＫプラド美術館３　共著）　日本放送出版協会　平成四年八月
『民衆の祈りと美』（ＮＨＫプラド美術館４　共著「ムリーリョ　地上の影、天上の光」執筆）　日本放送出版協会　平成四年九月
『美・創造へ　１』（絹谷幸二、及部克人、米林雄一氏と共著）　文部省検定済教科書　高等学校芸術科美術Ⅰ　日本文教出版株式会社　平成五年四月
「ベラスケスとマドリード派」　『世界美術大全集16　バロックⅠ』（共著）　小学館　平成六年六月
「イベロアメリカのバロック美術」　『世界美術大全集16　バロックⅠ』（共著）　小学館　平成六年六月
「エル・グレコ　トレドの異邦人画家」　アサヒグラフ別冊西洋編28『エル・グレコ』（飯田善國、小川国夫氏と共著）　平成六年六月
「ピカソ神話の解体」　朝日美術館西洋編１『ピカソ』（飯田善國、赤瀬川原平氏と共著）　朝日新聞社　平成七年七月
「一六世紀のスペイン美術――ルネサンスの危機からマニエリスムの超克へ――」　『世界美術大全集15　マニエリスム』（共著）　小学館　平成八年十月

論文

「キュビスム考察以前の方法序説　一九〇〇―一八年」　卒業論文（審査　大沢武雄教授）　早稲田大学第一文学部　昭和四十三年三月
「ベラスケス　肖像のヒエラルキーと絵画の構造」　修士論文（主査　澤柳大五郎教授）早稲田大学大学院文学研究科に提出　昭和四十六年三月
「ゴヤのメランコリー」　『ゴヤ』展一九七一―一九七二年カタログ特装版　毎日新聞社　昭和四十七年年五月
「ベラスケス作《織女たち》　１――オリジナル画面の再検討――」　『跡見学園女子大学紀要』　13号　昭和五十五年三月
「ベラスケス作《ラス・メニーナス》――主題と構想をめぐって――」　『美術史』110号　昭和五十六年三月
「ゴヤの《黒い絵》――その成立と配置と解釈の問題――」　『澤柳大五郎古稀記念論集』　同朋舎　昭和五十七年三月
「ベラスケス、セビーリャ時代の再検討」　『跡見学園女子大学美学・美術史学科報』11号　昭和五十八年三月
「ベラスケス断章」　『跡見学園女子大学美学・美術史学科報』13号　昭和六十年三月
「エル・グレコのイタリア美術批評――クレタ、ヴェネツィ

ア、ローマ、トレドを結ぶ眼――（その1）」　SPAZIO 25巻2号（No. 50）　平成六年十二月

「《ゲルニカ》への道、ピカソ芸術の変貌とその根源」（英訳 The Road to *Guernica* —Transformations in Picasso's Arts and their Sources）『ピカソ　愛と苦悩――《ゲルニカ》への道』展図録　東武美術館、朝日新聞社　平成七年十月

「アトリエ　画家にして彫刻家、そしてモデルからボデゴンへ」（英訳 Atelier as Painter, as Sculptor, from Model to Bodegón）『ピカソ　愛と苦悩――《ゲルニカ》への道』展図録　東武美術館、朝日新聞社　平成七年十月

翻訳その他

F・J・サンチェス・カントン『スペインの素描』　世界素描全集5　講談社　昭和五十三年五月

ピエール・ガッシエ『ゴヤ全素描　Ⅰ、Ⅱ』全2巻（神吉敬三氏と共訳）　岩波書店　昭和五十五年六月

J・パラウ・イ・ファブレ『不滅のピカソ』（原題 Picassovivent　永澤峻氏と共訳）　平凡社　昭和五十八年十月

ダニエル・ジローディ『ピカソ　眼の記憶』　岩波書店　昭和六十二年十二月

イヴ・クリスト他著、オフィス・ド・リーブル編　『中世美の様式』上、下2巻（岡崎文夫、安發和彰氏と共訳）連合出版　平成三年二月

序文ルイス・ミゲル・ドミンギン、解説ジョルジュ・ブデイユ『ピカソ――闘牛』（太田泰人氏と共訳）　岩波書店　平成六年二月

「かくして、ゴヤは近代への扉を叩く」　堀田善衛著『ゴヤⅣ　運命・黒い絵』　朝日文芸文庫　平成六年十二月

J・パラウ・イ・ファブレ『ピカソ　キュビスム、一九〇七―一九一七年』（監修・神吉、監訳・大高、安發、岡村、木下氏と共訳）　平凡社　平成八年九月

J・ロヘリオ・ブエンディーア他著『プラド美術館』（日本版監修・大高、篠塚、安發、木下、松原と共訳）　岩波書店　平成九年二月